

## 男子と一緒に裸で健康診断を受けさせられたJDの話

この4月で大学4年生になる手島萌は、大学の健康診断のために体育館へと向かっていた。

到着すると、萌は受付に向かい、名簿に自分の名前を探した。だが、教員の女性が名簿を見て顔を曇らせた。「手島萌さん、4年生ですね……あれ、1年生の男子グループに入ってます。ごめんなさい…システムのミスです！」彼女は慌てて頭を下げ、眼鏡の奥で申し訳なさそうに目を細めた。

萌の心臓が一瞬止まった。「え、ミス？ うそ、男子と一緒になんてありえない！」彼女の声は震え、驚きと怒りが混ざった表情が浮かんだ。「スケジュールが詰まっていて、組み直す時間がないんです。どうか、この

ままお願いできませんか？」彼女は申し訳なさそうな声で萌にお願いする。「いや流石に意味わかんないって！」彼女の声は体育館に響き、周囲の学生たちが一瞬静まり、好奇の視線を向けてきた。教員はさらに頭を下げ、「本当にすみません。協力していただけますか？」と繰り返した。萌は深く息を吐き、頭を振った。「.....わかった。仕方ないけど...でも、ほんと最悪」と吐き捨て、受付を離れた。

萌のグループには、1年生の男子5人——佐藤悠斗、田中翔、高橋涼、鈴木健太、山本直樹——がいた。彼らは萌と同じ学部で、先輩後輩の顔馴染みだ。

「手島先輩、こんなミス、ひどいですよね？」佐藤が話しかけてきた。萌は苦笑し、「うん、ほんと最悪だよ」と返した。高橋は眼鏡の奥で目を細め、彼女をじっと見つめた。鈴木は好奇心に満ちた目で、彼女のブラウス越しに見えるおっぱいのラインを追っ

た。山本は無言で、彼女の全身をじっと見つめた。

最初の検査は身長体重測定だった。体育館の中央に体重計と身長計が設置され、仕切りもカーテンもないオープンな空間だった。看護師、40代くらいの女性が、グループに告げた。「6人全員、服を全部脱いで、靴も脱いでください。みんな一斉に測定します。時間がないので、早く！」彼女の声は事務的で、有無を言わさぬ調子だった。

萌の心臓が凍りついた。「え、ここで？ みんな一緒なの？」彼女の声は震えた。「冗談でしょ？ こんな無理！」と叫んだが、看護師は冷たく答えた。「ごめんなさい今回はこういうことになってます。早くしてください。時間が押してます」と、萌の訴えを一蹴した。萌は周囲を見渡した。男子5人が気まぐすそうに顔を見合わせ、すでにシャツのボタンを外し始めていた。彼女の心臓がドクドクと鳴った。「こんなの……ありえないよ

……」とつぶやきながら、彼女は震える手でトレーナーの裾をつかんだ。

萌は唇を噛み、震える指でトレーナーをゆっくりと脱いだ。トレーナーを頭から抜く動作で、彼女の黒髪が乱れ、肩に落ちた。